

母、進藤咲子について

川上 彰子

母は、一九二四年（大正十三年）に東京、麹町区富士見町で生まれ、すぐに小石川区駕籠町に転居、空襲で家を焼かれるまでそこにおりました。母の父は秋田県選出の代議士をしたこともある政治家でした。

母は政治家のお嬢様として贅沢な暮らしをしていたようです。家には様々な人が出入りしており、中には同郷の南極探検家、白瀬轟が寄付を求めて来宅したこともある、と聞いております。何人も女中さんがいたり、書生さんも預かっていたようです。ただ戦時中は、そのリベラルな思想から特高に睨まれており、窮屈な思いもしたようです。

母の母、つまり私の祖母が祖父と結婚する前に、白百合高女で数学を教えていたからだと思いますが、母も二歳下の妹も幼稚園から白百合に通っておりました。小学生の頃、渋谷駅で当時から有名だったハチ公を見たそうで、目やにだらけのとても汚い犬だった、と私がかっかりするような話をしておりました。小さい時から長唄三味線の稽古に週三日通っており、十七歳で名取も取った腕前だったようです。白百合ではフランス語しか習っていないので、東京女子大を受験するに

あたって最後の一年間、家庭教師について英語を勉強しただけでの受験となり、英語は全く分からなかったようですが、何とか合格した、きつとビリだったに違いはない、とよく申しておりました。フランス語は大分忘れていたと思いますが、九十歳を過ぎてもフランス国歌を歌っており、介護ヘルパーさんたちをびっくりさせておりました。

胸ふくらませての女子大生活でしたが、戦争の影がどんどん大きくなり、勤労動員で工場に行かされ十分な勉強もしないまま、結局一年繰り上げの卒業となりました。ただ、勤労動員先にわざわざ訪ねてきて、お昼休みに授業を下さった女子大の先生がいらしたそうで、その先生のこととは立派な方だった、いつも申しておりました。自分が教師になった時に、この先生のようにありたい、と深く思ったようでした。

灰色の学生時代のように思いますが、亡くなる数か月前に、「あのね、私、今まで誰にも言わなかったけど、女子大に行っている頃大恋愛をしたのよ。」と告白を始め、「相手の人は軍人で飛行機に乗る人だった

から戦死してしまい、私は彼のアルバムと私のアルバムを重ねて庭で焼いたの。それで私の青春は終わったの。」と私もびっくりするような話をしてくれました。私が「でもその人が生き残って結婚したとしても、幸せとは限らないしねえ。」と申しましたら、「うん、それはそうなのよ。」と笑っておりました。

一九四五年（昭和二十年）の五月に空襲で家を焼かれ、まだその燃えさが燻っているのを見て、父親に「お前は貴重な経験をしているのだ。」と言われ、「お父様の負け惜しみ」と心の中で反発した母でした。同じ年の六月に妹を突然の病で失い、そしてその二年後に大黒柱の父親を亡くした母は、母親と二人きりになり、どんなに心細かったかと思えます。ただ、父親譲りの負けじ魂は心に秘めており、その後の活躍はこの負けじ魂のたまものと思えます。

焼け出された後、母は九月の卒業まで東京女子大の寮におりました。そしてすぐに秋田県の能代高等学校で教職に就きました。都会育ちで、女子大を卒業したばかりの若い先生は大人気で、たった一年の奉職でしたが、母が亡くなるまでその時の生徒たちとは交流がありました。東京に戻り、ようやく池ノ上の秋田県育英会東京寮の敷地内の家で両親と暮らせるようになりました。当時母の父は寮監をしていたそう、その時寮生だった私の父と母は知り合い、一九五〇年（昭和二十五年）に結婚、翌年に私が生まれました。すでに未亡人となっておりました私の祖母、父、私との四人の貧乏生活が始まりました。父が結婚早々に結核に罹ったため、家事と育児は祖母に任せて、母は結婚

前から勤めていた国立国語研究所の三人の女性研究員の一人として仕事を続けざるを得ませんでした。

私の中の母はいつでも机に向かう母です。私が小さい頃、母が自分の布団の胸のあたりに小さな机をアーチのように渡して、目が覚めるといつでも仕事が出るようにしていたのが忘れられません。さすがにそれは胸に圧迫感があるのでしばらくして止めましたが、よく夜中もずっと起きて大きな座卓に本をいっぱい広げて、正座をして仕事をしておりました。その後ろ姿には鬼気迫るものがありました。辛くて「仕事を辞めたい。」と家事を担当してしてくれた祖母に言う、「今まであなたを支えてきた私はどうなるの？」と言われ、辞められなかったこともあったそうです。ただ、心の底には没落した実家の再興というものがいつもあったように思います。頑張り屋で、介護用ベッドに寝ていても、「論文を、そして本を書く！」と言って、九十歳まで論文を書いていたのには驚かされました。

仕事には鬼のような母でしたが、家庭ではとても楽しい人でした。家事は父に任せて殆ど何もいたしませんでした。たまに料理をすることもありました、亡くなった本人には申し訳ないのですがお世辞にも上手とは言えませんでした。手順を無視し、味見は全くしないので、私は子供たちと陰口を言っておりました。本人は「私はやれば出来るのよ、美味しいでしょ？」とご満悦でしたが。仕事の辛さに打ち勝つために、これが終わったら何か楽しいことをしよう、と思っていたらしく、「私、いいことを思いついたの！〇〇に行つて皆でご飯を食べま

しょう！」などとよく申しておりました。

好奇心が非常に強い人で、何にでも興味を持ち、テレビや新聞の情報を書き留めたり、意味が分からなければ孫に聞いたりしておりました。母の雑記帳には、料理の作り方から最先端のコンピュータ用語まで書き留めてありました。野球は特に好きでイチロー、松坂大輔に始まり、ハンカチ王子、マー君に次々夢中になり、私の長男が大学生の時には、渡米前のイチローを応援しに二人でドーム球場に行ったこともございました。元氣であれば、大谷翔平を野球場に見に行っていたと確信しております。

勝気で怒られるのは大嫌いな母でした。四年前の夏に、父が冷房と暖房を間違えたため、三十度の部屋ですっと仕事をしていた母は熱中症になり、当時糖尿病で通っておりました女子医大に運ばれたことがございました。私の夫が救急車で同行いたしました。毎日薬をきちんと飲んでいないことが分かってしまい、担当医に大変怒られたそうです。始めは大人しく怒られていたようですが、だんだんに腹が立つてきたらしく、「先生、私は自由でいたいんです。自由でなければ死んだ方がましです！」と八つ当たり気味に申し上げたそうです。その時の担当医がたいしたもので、「あのね、進藤さん、自由というのは自分がやるべきことをきちんとやってから言うものですよ。」と、自由と自分勝手を混同する気のある母を諭して下さったそうで、その話を聞いて家族一同女子医大のお医者様にご挨拶をいたしました。

生協にも加入しており、毎週来る分厚いカタログをくまなく眺め、

欲しいと思うものはすべて後先を考えずに注文しておりました。そして一昨年の三月には何と三万円分の食料品が届き、私が帰宅するとヘルパーさんがおろおろしていて、「どうしましょう、冷凍庫も冷蔵庫もいっぱい入りません！」と言われました。もともと使いきれない食料品が冷凍庫の引き出しも開かないくらい入っているところに、又山のような食料品が来るのですから、私は怒り心頭で「何でこんなに注文するの？私をいじめているの？」と申しましたら、「えへへ、だって欲しかったんだもん、カタログに簡単な作り方も書いてあって、私にも出来ると思って。」と全部聞き流されてしまいました。そしていつも最後は逆切れし、「あなたは戦争を知らないからそんなことを言うのよ。物が無いってどんなに辛いことか知らないでしょ？」と開き直るのです。

母はとても情の深い人でした。一人娘の私には愛情の限りを注いでくれて、私の三人の子供たち、そして母からすると三人のひ孫たちも同じように大変可愛がってくれました。そしてその情の深さは家族に留まることなく、学生時代のお友達、仕事でのお仲間、学生の方々に降り注がれていたと思っております。相談を受ければ自分のことのように不幸と一緒に嘆き、理不尽なことに対しては一緒に怒り、嬉しいことも一緒に喜んでおりました。機会があればお洒落なレストランでご馳走をするのが大好きでした。母の小さい体から暖かい空気がフワッと出てきて全身を包み込んでくれ、溢れんばかりの笑顔に私はいつも励まされておりました。ワガママなところは多々ございま

て、隣に住む私は迷惑も大分蒙りましたが、大変可愛らしい人でもありませんでした。

この度、母が大変に尊敬しておりました丸山眞男先生の機関紙に、母のことを書かせていただく機会をいただき有難く思います。「こんな恥ずかしいことを書いて！」と怒られそうな気がいたしますが、家庭での母を紹介させていただきました。